

台湾の近代化の過程で日本人が果たしてくれた不惜身命の支援や貢献にも素晴らしいものがありました。彼らの祖国である日本そのものに対する明治維新直後からの近代化へのアメリカ人の貢献にも目を瞠るべきものがあつたのです。

はるかな大海原の波濤を越えて、当時はまだ台湾と同じような「絶海の孤島」だと思われていたこの国にやつてきたお雇い外国人と呼ばれる欧米人の中には、まさに利害を超えて、「何とか日本を列強に劣らぬ先進文明国家に育て上げたい」と熱心に願う超一流の人材がたくさんいたのです。「日本の美」を再認識させてくれたフランシスコ・フェノロサしかり、「ローマ字」の導入など洋学の普及と発展に献身してくれたジエームズ・ヘボンしかり、北海道開拓のために献身的な努力を傾けてくれた現職の農務局長ホーリース・ケプロンしかりです。

もちろん、イギリス人やドイツ人などのヨーロッパ人もたくさん来日しましたが、当時建国百年にも満たない若いアメリカ合衆国から助けにきてくれた人が特に多かったのです。なかでも、大学学長という栄光の座を抛つて酷寒の札幌に住み着いたウイリアム・クラークの熱意と誠実さには並はずれたものがありました。敬虔なクリスチヤンでもあつた彼は、早くから、

「物質的な発展や近代化もさることながら、あくまでも国造りの根幹となるのは人間なのだから、精神的な成長や発展こそが他の何よりも大切だ」

という固い信念を持っており、横浜の街に降り立つや否や、直ちに数十冊の英文の『聖書』を買い入れ、それを抱えて北海道に急行しました。そして、札幌農学校の開校式が終わるとすぐに、第一期入学生十六名全員に一冊ずつ手渡して、毎回、正規の授業を始める前に必ず『聖書』の輪読会を行つたのです。それまではキリスト教とは縁もゆかりもなかつた旧武士階級の子弟たちでしたが、いつの間にか自分の姓名までしっかりと書き込んでくれていた真新しい『聖書』を開いて、今さらながらのようにクラーク博士の温かくも高い精神に深く感動して、熱心に読み耽るようになつていきました。

しかし、このことを知った黒田清隆長官は大いに驚き、かつ慌てたのです。三百年の鎖国時代を通じてずっと「ご禁制」とされてきたキリスト教が解禁となつたのは、明治六年（一八七三年）になつてからのことです。ましてや、硬骨の黒田は名うての「キリスト教嫌い」で通つていたのです。

「ことあるうちに、官立の学校で聖書を読ませるとは何事か」とばかり、クラーク博士を官邸に呼びつけ、

「直ちに輪読会を中止せよ」

と厳命を下しました。しかし、クラークは一步も後へ引こうとはせず、逆にこう言い切つたのです。

「これは異なることを<sup>うけなまわ</sup>承るものです。あなたは、かつて私にこう言つたではないですか。『クラーク先生をはるばる日本にお招きするのは、ただ単に日本の未来を背負つて立つべき有為の青年たちに知識を授けていただくだけではなく、德育を施してもらいたいと思つたからこそです』。私がクリスチヤンであることは、あなたも先刻ご承知のはずです。クリスチヤンにとつて、德育を授ける道はただ一つしかありません。『聖書』の教えを徹底的に説くことです。それがお気に召さないのなら、私にはとてもこのたびの大任を果たす自信などありません。直ちに解任してくださつて結構です」

さすがの黒田清隆も、これを聞いてすっかり参つてしましました。しかも、もともと典型的な薩摩隼人のことですから、いつたん了解すると後は竹を割つたようにさっぱりした性格で、

「わかりました。そのようなことなら黙認することといたしましょう。ただし、校内で公然と礼拝されるのは困りますので、『聖書』を倫理の教科書として研究するという形にしていただけませんか」

そして、これを機に、黒田とクラークはますます深く尊敬し合うようになり、その後、

黒田長官が学校の視察に訪れたときなどには、学生たち全員があまりにも礼儀正しく眞面目なのに感動して、

「さすがに、キリスト教による倫理教育は素晴らしい。これから後は、クラークさん、あなたの思うようにやつてください」

と言つて、固く手を握りしめたといいます。

こうして、札幌農学校は、当時の日本としては最も進んだ聖書教育の橋頭堡の一つとなつていったわけですが、実は多忙を極めるウェーリアム・クラーク博士が日本に滞在していた期間は、わずか八ヶ月にしかすぎなかつたのです。しかし、この短い間に、彼はこの新しい高等教育機関の骨組みを築き上げ、後に素晴らしい信仰者たちをたくさん残して、第二期入学生たちである新渡戸稻造や内村鑑三たち以後の学生たちにも強い影響力を与え続けることとなつたのです。

アメリカに帰国する日が差し迫つた明治十年（一八七七年）の三月に、クラーク博士は、自らの手で「イエスを信ずる者の契約」をしたため、「これに同意できる人だけサインしてください」と呼びかけました。すると、どうでしょう、第一期入学の十六名全員が先を争うようにして署名したのです。有名な、「ボーアズ・ビー・アンビシャス」

という言葉を残して、クラーク博士が帰途についたのは、それから一ヶ月も経たぬ四月のことでしたが、その直後に初めて北海道の地にやつてきたのが、新渡戸稻造たち第二期生たちだつたのです。

### 北海道で洗礼を受けた新渡戸稻造

実際に意外なことではありますが、かの有名なウイリアム・クラーク博士と、新渡戸や内村ら後の日本におけるキリスト教布教の中核となるべき若者たちは、たつた一步の違いで顔を合わせる機会はなかつたのです。なかでも、早成の少年新渡戸は、札幌農学校の最初の学生募集の際に見事に合格していたにもかかわらず、あまりにも年齢が若すぎたために、第二期入学組のほうに回されてしまつていたからです。

しかし、ここが、「精神教育」の素晴らしいところで、クラーク博士の**聲咳**<sup>(けいがい)</sup>に接することなど全くなかつたにもかかわらず、その高貴な魂と生き方は、第一期生十六名の先輩たちを通じて見事にバトンタッチされ、やがて『武士道』や『代表的日本人』などという素晴らしいメッセージが、日本から世界に向けて発信される原動力となつたのです。

十六名いた諸先輩のうちで、新渡戸青年が最も大きな影響を受けたのは、やはり故郷を同じくする旧南部藩出身の佐藤昌介でした。

佐藤昌介は、安政三年に、南部藩士の佐藤昌蔵の長男として、陸奥国（現在の岩手県）の花巻で生まれました。幼名は謙太郎といい、父親の昌蔵も、後に代議士として活躍することになりますが、やはり明治期に早々とキリスト教に帰依した旧武士の一人です。

栄えある「札幌農学校」の第一期生の一人となつた佐藤昌介は、教頭としてアメリカからやってきたウイリアム・クラーク博士から直接親しく薰陶を受け、やがて人一倍熱心なキリスト教徒としてメソジスト教会に所属するようになりました。そして、農学校を卒業すると同時に、「開拓使御用掛」として公職に就き、一八八三年にはアメリカに留学するチャンスを掴み、当時としては珍しい「農政学」を専攻しました。

このような素晴らしい先輩に恵まれた新渡戸稻造や内村鑑三ら第二期生の中からも、やがて世界的な傑物となる人々がたくさん出てきました。後に文化勲章を受章する植物病理学の世界的権威、宮部金吾（一八六〇～一九五一年）などもその一人ですが、草創間もない札幌農学校が、いち早く東京のエリート大学に勝るとも劣らぬ超一流の高等教育機関として急成長を遂げていったのは、まさに驚異的なことだと言わねばなりません。